

KOKORO

特集

「モンゴル国における知能検査の開発」 発刊



2022年3月に、「モンゴル国における知能検査の開発 子どもに寄り添った発達支援を目指して」を発刊しました。

本書は、2016年から行ってきた田中ビネー知能検査モンゴル版開発の経過を詳細に描く中で、検査開発を通して見えてきた、日本とモンゴル国との環境や文化、教育の違いと、それが発達支援に与える影響を書いたものです。

モンゴル国における子ども発達支援の現状について検討する中で、子どもの発達を評価するためのツールがないことが、支援を行っていくうえでの大きな問題であると考えました。一部で外国の検査を翻訳して使われていましたが、モンゴル国の子どもたちに合わせた問題や評価基準になっているかどうかについては調べられていないものでした。そこで我々は、2016年からモンゴル国立教育大学と協働で、田中ビネー知能検査モンゴル版の開発に着手しました。田中ビネー知能検査は、わが国で最もよく使われている子どものための知能検査のひとつで、日本では医療、教育、福祉、行政など多くの領域で用いられています。

開発にあたっては、原著者の田中ビネー研究所の大川一郎、中村淳子先生の指導を受け、JICA 技術協力プロジェクト「障害児のための教育改善プロジェクト」の協力を受けて行われました。

検査は開発するだけでは有用なものとはなりません。検査結果を子どもの発達支援に活かすためにはどうしたら良いのかを考え、適切に検査を行い、結果を解釈して、発達支援に活かすことができる人材を養成することが必要であると考えました。本書では、検査者養成のためのカリキュラムの詳細や養成研修を行う中で見えてきたモンゴル国の課題についても述べられています。

教育や文化が異なる地域へ新しいツールを持ち込むことの意味や影響を考えるという点で、発達支援、心理アセスメント、検査

開発などの心理学・医学・教育学の専門家の他に、国際比較や異文化理解に関心のある方に広く興味を持っていただける内容であると考えます。

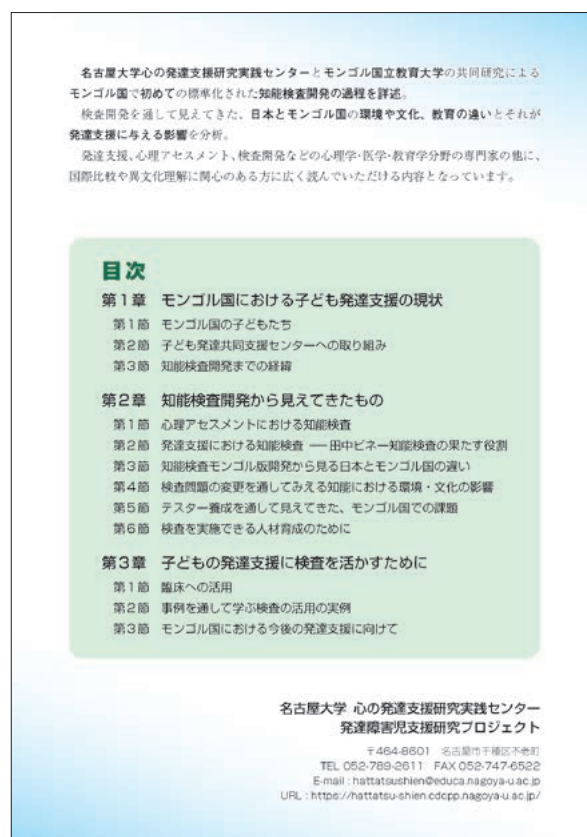
モンゴル国における 知能検査の開発

子供に寄り添った発達支援を目指して



永田雅子／野邑健二
名古屋大学心の発達支援研究実践センター
[編]

明石書店



活動報告

フィンランド滞在記

金子一史 こころの育ちと家族分野

2022年の8月13日から9月18日までの1ヶ月間、フィンランド・トゥルク大学の Andre Sourander 教授の研究室に Visiting fellow として滞在する機会に恵まれました。今回の滞在では、トゥルク大学の INVEST フェローシップの助成を受けました。実は2020年の6月に助成は決定していたのですが、コロナ禍のために訪問が延期になっていて、2年越しでようやく実現しました。日本ではマスク姿が一般的な時期に、フィンランドではマスクをしている人の方が珍しく映っていました。

以前にも2016年に Sourander 研究室には滞在したことがありますが、今回はリモートも増えているとのことで、やや以前に比べて出勤しているメンバーも少ないようでしたが、それでも毎日活発に研究ミーティングやディスカッションが行われていました。今回の訪問では、児童青年期のメンタルヘルスに関する国際比較共同研究の遂行を主な目的としていました。訪問中も Sourander 先生が、ドバイ・韓国・スペイン・モンゴルの初対面の研究者達とオンラインによるミーティングを行い、次々と仲間に引き入れていく有様を直に観て、正直呆気にとられてしまいました。Sourander 研究室には、世界中から若い人材が集まってきており、ネパール人やマレーシア人の若手研究者とも知り合いになる事が出来ました。ネパール人の Sanju とは、今年の5月に京都で開催されるアジア児童青年精神医学会で、コロナ禍や自然災害などの脅威が子どものメンタルヘルスに及ぼした影響についての共同シンポジウムを開催することになっています。

滞在中には、私のもう一つの研究テーマである乳幼児のメンタルヘルスについて、セミナーでプレゼンを行いました。メンタルヘルスの活動は、現状や歴史的背景、導入可能な資源などが同一では無いことから、諸外国によって違いが認められます。日本の実状や、これまでに共同発表した論文の紹介を行ったところ、大きな関心を持たれました。また、同時期に名古屋大学からオスロ大学に交換留学に訪問中だった私の指導院生の Xiao さんも、青年期のメンタルヘルスの国際比較研究について、プレゼンをする機会を得ることが出来ました。日程調整の結果、オスロからリモートでプレゼンを行った後に、トゥルク大学に訪問することとなりましたが、Sourander 先生の歓待を受け、大変貴重な機会となりました。

このように、国際的な研究を邁進している研究室を直に訪れたことによって、大変大きな刺激を受けることとなりました。そして、今後はますます国際的な視野を持って研究を進めていかなくてはならないことを、改めてこころに刻むこととなりました。

心理発達相談室 事務室の改装

心理発達相談室 事務室の改装

小島朱理 臨床助手

心理発達相談室では、2014年にプレイルーム2の改修、2018年に第6面接室・プレイルーム3の増設が行われ、2021年には名古屋大学の施設課や当相談室スタッフである大学院生の意見を取り入れつつ、プレイルーム1の改修も行われました。一般の方をお迎えする施設であることから、長期にわたり相談室環境の整備に取り組んできましたが、来談される方が最初に訪れる受付は整備が進んでいませんでした。

そこで、2022年から2023年にかけての年末年始のお休みを使って、受付である事務室の改装を行いました。来談される方が最初に目にする受付周辺の壁は汚れが目立っていたため、壁の塗り直しを行いました。事務室内では、内開きだった扉を引き戸にしたことで、出入り口付近のスペースが確保され、活動がしやすくなりました。また、事務スペースと電話シフトスペースを区切るために設置されていたパーテーションを固定式にしたことで、パーテーションが倒れる心配なく安心して活動ができるようになり、電話シフトスペースの机を少し大きいものに替えて資料等を置く場所が広がったことで、電話受付の対応がよりスムーズに行えるようにもなりました。その他にも、コンセントとネット・電話回線の位置の変更やカーベットの貼り替え等を行い、スタッフがより快適に事務室を利用することができるようになりました。

今回の改装によって、来談される方だけでなく、スタッフも快適に過ごすことができる環境が整備されました。今後は、スタッフの活動によってより良い相談室としていけるよう、真摯に取り組んでいきたいと考えています。



改装後の受付（事務室出入口）



改装後の電話シフトスペース



アジアにおける発達障害児支援研究 in モンゴル国

野邑健二 特任教授

本センターの発達障害児支援プロジェクトでは、活動の一環として、2013年からモンゴル国において、発達障害児支援に関する共同研究を行っています。

活動の拠点は、モンゴル国立教育大学内にある「名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター」で、現地の専任教員とともに、発達障害児支援に関する研究、実践、啓発、人材育成など幅広い活動を展開しています。

現在、以下のような活動を行っています。

1. モンゴル国における発達障害児の疫学調査および現状把握調査

発達障害児への支援を検討し、その体制を整えていくためには、その国、地域にどのくらいの発達障害児がいて、どういう状況で過ごしているのかを把握することが必要です。モンゴル国では、発達障害児の状況について十分な調査が行われてきて現状があることが現地の専門家と共有され、把握のための調査を行う準備を進めてきました。本調査は、モンゴル教育大学とモンゴル医科大学精神科との三者共同研究です。

調査は、4000人の子どもに対する保護者および教員への質問紙調査として行う第一次調査と、第一次調査の結果をもとに発達障害群及び対照群（計210人）に対して実際に専門医による面接と知能検査を行う第二次調査から構成されます。

コロナ禍の中、準備を進めてきましたが、ようやく始めることができるようになりました。2023年1月現在、質問紙調査を実施中で、モンゴル国内5地域から4000人分の調査結果が送られてきています。

本研究は、令和4年度日本学術振興会二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究の助成を受けて行っています。



医科大との協議

2. 児童精神科医養成プロジェクト

モンゴル医科大学精神科および小児科の先生方から、モンゴル国における児童精神科医養成に協力してほしいとの要請がありました。モンゴル国では、発達障害も含めた子どもの心理発達面での問題に対する支援・治療への関心が近年高まってきています。しかしながら、子どものこころの問題を診療する児童精神科医は、モンゴル国内でも数名しかいないという現実があります。

本プロジェクトでは、本学医学部親と子どもの心療科の協力を得ながら、日本の専門医養成システムをモデルに、モンゴル国における児童精神科医養成を行っています。

本プロジェクトは、令和4年度アジア共創教育研究機構融合プロジェクトの助成を受けて行っています。

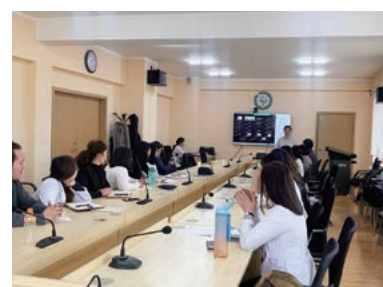


医科大講演①

3. 田中ビネー知能検査モンゴル版 検査者養成

2020年に開発した田中ビネー知能検査モンゴル版は、現在は公的機関に限定して販売をしていますが、モンゴル国内の多くの専門機関で用いられてきています。

普及を進めるために、検査を実施することの出来る人材育成のための研修会を開催しています。研修は、検査についての基本的な内容を学ぶ講義、受講生同士で検査用具を



医科大講演②



ポスター



養成研修講義①



養成研修講義②



使ってみる演習、実際に子どもに協力してもらって行う実習、実習で作成した検査報告書を添削、解説まで含めた計5日間の日程で行われます。研修を受けることで、検査の実施、解釈、支援への応用を一貫して行える専門家育成を目指しています。現在までに約100名の修了生が誕生しています。本研修は、一部にセーブザチルドレンの支援を受けて実施しています。

4. 専門家向け研修会の実施

発達障害に精通した専門家育成のための研修を、モンゴル国の専門団体と協働で行っています。

心理職向け研修会

令和4年4月19日に、モンゴル国立教育大学において、心理職向け研修会「モンゴル版田中ビネー知能検査の実践による子どもの発達アセスメント」を行いました。

この研修会は、名古屋大学心の発達支援研究実践センターとモンゴル国立教育大学、モンゴル国心理士学会が共同開催したもので、心理職、大学教員、行政関係者など70名以上の参加がありました。

名古屋大学からは、オンラインで永田センター長が挨拶を行った後、横山特任助教が「日本における発達アセスメントの現状と発達支援におけるアセスメントの重要性」、野邑特任教授が「子どもへの心理検査実施における倫理的側面」について講演を行いました。その他、モンゴル教育大学のオドゲレル先生が「モンゴル版田中ビネー知能検査」開発の経緯」のテーマで講演を行いました。

研修会には、モンゴル国のパチェック心理士学会長も参加され、モンゴル国における心理職の現状と今後の研修の必要性、田中ビネー知能検査の活用について、お話をされました。

学校教員向け研修会

令和5年2月7日に、モンゴル国立教育大学において、学校教員向け研修会「発達障害児の理解と支援のために」を行いました。本研修会はモンゴル国立教育大学との共同開催で、本センターの金子教授、野邑特任教授、横山特任助教の他に、本学医学部親と子どもの心療科の加藤助教も参加して、発達障害児への理解と支援について、臨床心理学および児童精神医学の立場から講演を行いました。



モンゴル研修（4月）①



モンゴル研修（4月）②

アジアにおける発達障害児支援研究 in ベトナム

2022年12月に、3年ぶりにベトナムを訪問しました。

ハノイ教育大学では、特別教育学部の Thu 先生を通じて、同学部の先生方とお会いし、学部間の協力関係の構築や発達支援に関する共同研究について具体的な検討を行いました。

ハノイ医科大学では、精神科の Tuan 先生とお会いし、両国の発達障害児支援研究の進展について情報交換をし、今後の研究協力についての協議を行いました。

両大学とは、コロナ禍でも ZOOM での研究ミーティングやオンライン学会への参加などを通じて交流を続けてきましたが、直接お会いすることができたことで、新たな展開がひろがってきました。

2023年3月にも訪問して、以下の活動を進めていきます。

1. ハノイ教育大学との学術協定の締結

今後の研究、教育を含めた幅広い協力関係を進めるために、ハノイ教育大学との学術協定を締結します。今後の共同研究についても、本センターと教育発達科学研究科が協働して進めていくことを目指していきます。



ハノイ教育大学ミーティング



ハノイ教育大学集合写真

プロジェクト報告

2. 新版 K 式発達検査ベトナム版の開発

子どもの発達を支援するためには、適切な評価に基づいて行うことが必要ですが、ベトナムの子どもに適用される幼児期の発達を評価する検査がありません。発達検査は、国や文化によって、内容や評価基準が変わってくるため、その地域に合うように標準化を行うことが必要です。

我々は、我が国において幼児期の発達評価に広く用いられている新版 K 式発達検査をベトナムの子どもたちに使うことができるよう、ベトナム版の開発を行うことを企画しています。この試みは、検査開発者の京都国際社会福祉センターの協力を得ながら、ハノイ教育大学特別学部の教員とともに行うこととなっています。

3月には、京都国際社会福祉センターの開発者にもハノイに同行いただき、検査に対する理解を深めて、今後の開発への道程を明らかにできればと考えています。



ハノイ医科大学集合写真

〈客員教員〉 Dinh Nguyen Trang Thu 先生（ハノイ教育大学特別教育学部）

ハノイ教育大学特別教育学部の Dinh Nguyen Trang Thu 先生が、心の発達支援研究実践センターの客員教員として6月12日より7月12日まで着任されました。Thu 先生は、特別支援教育の研究者で、発達障害児の療育指導を大学の相談室や自らが運営する療育施設で実際に長年行っている優れた臨床家でもあります。在任中は、センター教員との研究協議、学生および教職員向け講演、日本の関連施設視察などを精力的に行ってくださいました。



東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム

2021年に結成された「東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム」では、東海国立大学機構内における様々な領域の発達障害研究者が集まって、アジアの発達障害研究を展開する機関とも連携して、専門情報の発信や、発達障害児支援システム構築のための学際的な共同研究を展開させ、学術・地域・国際的な観点での社会貢献を追求するための活動を行っています。

本活動は、令和3年度東海国立大学機構大学横断研究推進プロジェクトの助成を頂いています。

1. コンソーシアムのメンバー

コンソーシアムには、心理学（発達、臨床、認知）、教育学（特別支援）、医学（児童精神医学、作業療法学）、工学などの専門家が参加しており（表1）、基礎から臨床まで多様な視点から発達障害児支援研究を展開しています。

表1 東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム メンバー

名古屋大学	岐阜大学
心の発達支援研究実践センター	教育学部・学校教育教員養成課程・学校教育講座
永田雅子 野呂健二 横山佳奈	別府哲
大学院・情報学研究科・心理・認知科学専攻	教育学部・学校教育教員養成課程・特別支援教育講座
平井真洋	平澤紀子 村瀬忍
大学院・医学系研究科・総合保健学専攻	工学部・電気電子・情報工学科
五十嵐剛 佐野美沙子	寺田和憲
医学部附属病院 親と子どもの心療科	
高橋長秀 加藤秀一	
心の発達支援研究実践センター／学生支援本部アビリティ支援センター	
工藤晋平	

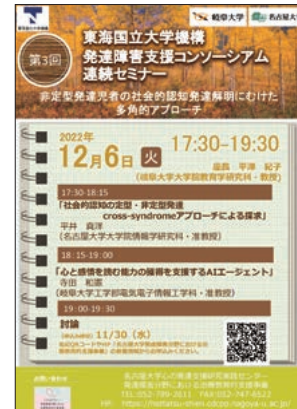
令和5年4月1日現在

2. 連続セミナーの開催

コンソーシアム構成メンバーを中心に、発達障害に関する連続セミナーを開催しました。セミナーでは、分野の違う専門家による講演のあと、参加者も含めたディスカッションが行われました。オンラインでの開催でしたが、熱心な議論が行われました。

3. Web サイトの作成

本コンソーシアムの活動内容、セミナーなどのお知らせ、発達障害の最新研究内容などを情報発信するために、Web サイトを作成しました。「東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム」で検索いただくか、QR コードからお入りください。



国際シンポジウム

「モンゴル国における発達障害児支援のあゆみと課題」

日時：令和5年3月10日（金）18時から20時（オンライン）

1. モンゴル国の発達障害児支援の現状と課題

Nergui Oyuntungalag（名古屋大学モンゴル教育大学子ども発達共同支援センター）

2. モンゴル国自閉症協会の活動

Lkhagvajav Altangerel（モンゴル自閉症協会）

3. 心の発達支援研究実践センターのモンゴルでの取り組み

野邑健二（名古屋大学心の発達支援研究実践センター）



リレー企画（兼任教員より）

心の発達支援研究実践センターニュース 第三弾

名古屋大学の学生診療、そして、フランスでの臨床へ

古橋忠晃 名古屋大学総合保健体育科学センター

私は、名古屋大学総合保健体育科学センター所属の精神科医でキャンパスの学生の専任相談員である。2005年に着任して以来、現在まで、おおよそ18年この仕事に従事してきた。着任当初より、「ひきこもり」の状態にある学生に出会う機会が多く自然と「ひきこもり」が専門になっていったが、もともとフランスの精神医学を専攻してきたこともあって、最近、私はフランスでの「ひきこもり」の訪問診療、医療従事者向けの講演活動や一般市民向けの市民講座、さらにはストラスブールにあるフランス依存協会（ITHAQUE）内の「回り道（Détours）」という名称のひきこもり家族相談窓口（この窓口を現地の心理士らと私の助言のもとに立ち上げたところ、フランス各地から「ひきこもり」を身内に抱えた家族が相談に訪れるようになり定期的に対応する心理士たちのスーパーヴァイズをおこなっている）でのスーパーヴァイズなどのために、一年に約三度一回で二ヶ月弱ほど、合計年間5ヶ月ほどフランスや周辺諸国に滞在している。

以上のようなある意味では類いまれな臨床活動をフランスにおいて実現できたのは、名古屋大学の学生に、自身の状態や症状についての的確に説明していただき、教えられることが多かったからである。同じ「ひきこもり」でも、知的で語彙も豊富な人のほうが自身に起きていることをきちんと分節化できるのであろう。

さて、このだよりを執筆している2023年1月現在も、フランス各地の大学やメンタルヘルス関係の協会などにより、専門家向け、一般市民向けの講演会がいくつも企画されているのと、ひきこもりの訪問診療が多く予約が入っているので、1月中旬すぎから再び渡仏の予定が入っている。まずはフランス領ポリネシアのタヒチに講演のために滞在して、それからフランス本土に向かう予定である。なぜ、タヒチかと言うと、2022年6月にフランスのニースで医療従事者向けに講演をしたときに、フランス領ポリネシアで、成人男性のなかに、妻の代わりに子育てをしているうちに、そのまま仕事をしないで長期にわたって家に閉じこもってしまうという「ひきこもり」に類似した現象があるという指摘を聴衆の精神科医から受けたように、フランスではこの現象は心理士たちの間で比較的名で、そのこともあってタヒチの大学から「ひきこもり」の講演の依頼を受けたからである。



スタッフ紹介

■センター長・こころの育ちと家族分野



永田 雅子
教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子支援
・発達障害の早期介入
・乳幼児精神保健

■こころの育ちと家族分野



金子一史
教授・発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病およびボンディング障害への介入
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究



■こころと社会のつながり分野



野村あすか
准教授・学校臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものウェルビーイングと
学校・家庭環境とのかかわり



野呂健二
特任教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス



横山佳奈
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・子どもの社会性の発達支援

■こころの支援実践分野



鈴木健一
教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における
対人関係精神分析の援用



杉岡正典
准教授・学生相談
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助
・地域援助、コミュニティ心理学



竹本美穂
助教・就職相談
●研究テーマ：
・大学生のキャリア支援
・障害学生のキャリア支援

2023年度予定

東海国立大学機構発達障害児支援コンソーシアム

東海国立大学機構発達障害児支援コンソーシアム
連続セミナー第4回

日 時 令和5年6月28日（水）18時から20時（オンライン）

テーマ 「発達障害児の学習・運動への支援」

司 会 寺田和憲（岐阜大学・工学部・電気電子・情報工学科）

「ディスレクシアのある児童生徒への文字の読み上げを用いた支援」

村瀬忍（岐阜大学教育学部）

「ASD 児者の運動・運動学習特性と支援」

佐野美沙子（名古屋大学大学院・医学系研究科・総合保健学専攻）

●編集後記

センターニュースの第14号をお届けいたします。本号の記事では、モンゴル・フィンランド・ベトナム・フランスと、世界との繋がりがより強固になっている様子が見て取れます。ちなみに、第1号を発行したのは2009年度で、客員教授として招聘したフィンランド・トゥルク大学の Sourander 教授を交えた座談会と、軽度発達障害分野における治療教育的支援事業から構成されていました。両者ともに、本号との内容には強いつながりがあり、本センターの展開を示唆していたようにも思われます。今後、より一層の展開と深化を遂げられるよう、スタッフの皆さんと共に努めていければと考えています。

金子一史 教授 記

KOKORO

名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース

NO.14・2022年度